【授業科目】臨床化学検査学実習Ⅱ　Clinical training of Laboratory Clinical Chemistry Ⅱ

担 当 教 員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
高崎 昭彦	２年次 後　期	必 修	1	30	実習	あり	巻末 掲載	可

授業概要 （内容と進め方） 及び課題に対する ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	授業概要／臨床化学検査学実習Ｉで習得した技術を基に、各種の検査法について理論・知識をさらに深め、それら検査法を迅速に実践するための技術を教授する。本実習では検査値を変動させる薬物などの影響物質を調整し、実習班単位で模擬検体を作成し測定する。同時に自動分析装置の測定も行い、用手法との違い、特性を理解させる。測定結果は疾患との関連をシミュレートした考察を含め、実習班ごとのプレゼンテーション発表として行う。また臨床化学検査学の知識を駆使し、新たな測定法も考えさせる。 課題に対するﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法／提出されたレポートにコメントをつけて返却する。提出された課題について、全体の総評コメントを掲示にて公開する
実務経験に関する 授業内容	臨床検査士技師の臨床経験をもつ教員が、臨床検査技師として必要な臨床化学検査の知識について、現場業務項目に関する資料・教材を交えながら指導していく科目である。
授業の 位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。
到達目標 （履修者が到達 すべき目標）	①現場で導入されている自動分析装置の原理、操作法、精度管理を理解し、説明できる。 ②各検査項目に影響する共存物質について理解し、説明できる。 ③検査結果から病態を推測する技術を習得し、説明できる。
時間外学習に必要な 学修内容および 学習上の助言	臨床化学検査学実習Ｉで学んだ知識を発展させ、特に検査結果に影響を与える共存物質の影響、精度管理、Ｒ－ＣＰＣを学修する。他分野の検査結果との関連性も重要になるため総合的な知識を必要とする。しっかり予習・復習すること。 第１回～15回事前学修：指定の教科書・資料を事前に読んでおく（各３０分） 第１回～15回事後学修：各回での実習を復習することで確認し、解らなかったことは調べ教員に質問する（各３０分） ※その他に、実習で学んだことを振り返るための課題を課す（各６０分）。
	※上記時間については、指定された学修課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位１５回科目の場合：予習+復習４時間／1回）（１単位１５回科目の場合：予習+復習1時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。
授業計画	第 1・2 回　酵素（LD、ALP、AMY、CK）の測定、血中TP(ビュレット法)の測定、POCT測定 第 3・4 回　未知検体測定１－１、各班で影響物質を選定し添加測定する 第 5・6 回　未知検体測定１－２、自動分析装置測定、他の検査項目測定、考察する 第 7・8 回　未知検体測定２－１、各班で影響物質を選定し添加測定する 第 9・10 回　未知検体測定２－２、自動分析装置測定、他の検査項目測定、考察する 第 11・12 回　未知検体測定３－１、各班で影響物質を選定し添加測定する 第 13・14 回　未知検体測定３－２、自動分析装置測定、他の検査項目測定、考察する 第 15 回　まとめ、各班ごとに実習目的、結果、考察を発表する 全て高崎
評価方法 評価基準	成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 講義ごとのレポート 50%、学期末試験 50%
教科書	参考資料を配布する　／　参考書等：なし
学生への メッセージ	病院の血液検査において重要な意味を持つ臨床化学検査。各実習前に使うプリントをよく勉強し、検査データの意味を正確に把握することを目的とし、勉強して欲しい。検体採取、精度管理なども重要になってくるので合わせて理解を深めてほしい。